ＥＳの樹

私たちは聴くことを大切にします。ESの文字を左右対称に合わせることにより対等な関係で耳を傾け心のささやきにも寄り添い聴くことを表現しています。

No. ２３　　2014年4月　発行

ボールのような言葉　より

「ともだち」の定義とはどういうものか、
とあらためて問われたら、
人によってずいぶんちがった答えになるでしょうね。
「ぼくはすっごくいっぱいともだちがいてね」
という人の孤独だって想像できます。
「わたしは、友だちがいない」
と泣いている人のことを、大事な「ともだち」だ
と思っている人もいるかもしれない。

糸井重里

も　く　じ

・事業部報告　　HR　&　SAYの会　　p.2～5
・RE：プログラム　紹介　　p.6
・研修報告　　p.7～8
・ドコモ市民団体への助成報告　　p.9～10
・角田尚子さんのブログより　　p.11～15
・メンバーのエッセイ　　p.15～16
・CAP活動報告＆助成金御礼　　p.17
・事務局からのインフォメーション　　裏表紙

HR(Human Rights)プロジェクト

2013 年度もたくさんの人たちとの出会いがありました。子ども・保護者・教職員・地域のおとな…たくさんの人たちと出会い、関わり、話すことで、子どものことを考えているおとながたくさんいることを実感しています。
また、大阪府内の小・中学校で実施している「エンパワメント授業」では毎年、子どもたちからたくさんのパワーをもらっています。継続校では「エンパワメントの人や～」「“目・耳・ハートは聴く合図”おぼえてるで～」、新規校でも「授業楽しかった」「今度いつ来るの？」「来年も来てな～」と子どもたちからの嬉しい声かけがたくさん！！
今年度は、コミュニケーション、感情の扱い、多様性教育などのプログラムの他に、「ピアメディエーション」や「PLT プログラム（公益財団法人高原環境財団助成事業）」も新たに展開。多くの人からもらった“パワー”を“エネルギー”にして、次年度も子どもたちの声を「目・耳・ハート」でしっかりと聴き、「みんなには力があるよ」「一人ひとりが大切だよ」と伝えていきたいです。

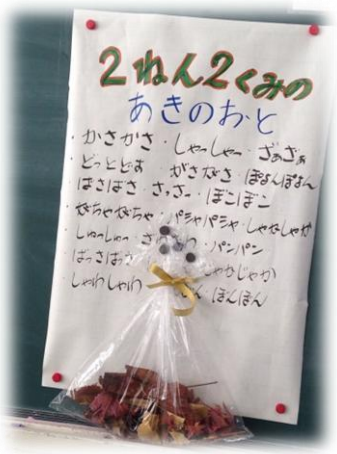
公益財団法人 高原環境財団助成事業 ～学校での PLT（木と学ぼう）プログラムの実践～

今年度、公益社団法人高原環境財団の助成を受け、大阪府内の小学校 4 校で PLT プログラムを実践しました。子どもたちが身近に自然体験ができる小学校の校庭・中庭で、自然物とふれあい、親しみ、発見をする。葉っぱや木の実で作った自分だけの「音」、木に聴診器をあてて木の音を聴き、ともに生きていることを感じる。また木の年輪を題材に、自分の成長と変化に気づく。音の聴こえ方、成長のスピード、感じ方、考え方は一人ひとり違うことに気づき、多様性を認め合い、自分も相手も大切にする。
子どもたちの自然に対する興味・関心はパワーあふれるものでした。自然体験をともに楽しみ、個々の発見を「〇〇ちゃん、すごいね」とともに認め合い、知識を共有しながら「へぇーー」と感心し合あう。認められて、ちょっぴり嬉しい顔・・・得意げな顔・・・照れた顔・・・学校の中で、自分自身が認められる体験はとても重要だと感じました。環境と人権を融合させたプログラムの実践を次年度も継続できればと考えています。

—PLT プログラム実施校—
堺市立原山台小学校２年生
富田林市立伏山台小学校１年生
河南町立中村小学校２年生・５年生
柏原市立国分東小学校１年生

〇PLT（Project Learning Tree 木と学ぼう）とは…
アメリカ森林財団の環境教育プログラム。自然の中で五感を使って、子どもの豊かな感情・感性を育み、また、自然の多様性を学びながら、一人ひとりの多様性に気づき、自然とのつながりを意識化し、自己肯定観を高めるプログラム。

＜2013 年度活動報告＞	
子ども対象	
堺市	○大仙小学校（全学年×2 回　ESD 実施校・2010 年より継続） ○原山台小学校（2 年×3 回　PLT プログラム） ○はつしば学園小学校（2・4 年　6 年×2 回）
柏原市	○柏原小学校（1・3 年）　○旭ヶ丘小学校(1 年) ○国分東小学校(1・5 年×2 回　1 年 1 回 PLT プログラム・6 年×3 回) ○堅下北小学校（3 年）　○堅下南小学校（2 年）
豊中市	○西丘小学校（全学年　ESD 実施校・2006 年より継続） ○南丘小学校（6 年）
箕面市	○北小学校(全学年　ESD 実施校・2010 年より継続) ○豊川北小学校(2・4 年・5 年×２回)　○箕面市立東小学校（4・5 年×２回）
富田林市	○喜志西小学校(3 年)　○伏山台小学校（2 年×2 回　PLT プログラム）
泉南市	○西信達中学校（2 年×2 回）　○西信達小学校（6 年）
河南町	○中村小学校（2・5 年×2 回　PLT プログラム）
子どもとおとな対象	
豊中市	○西丘小学校(6 年 2 クラス合同オープンスクール)
柏原市	○柏原小学校（2 年 2 クラス合同人権参観）
おとな対象	
行政	○大阪狭山市男女共同参画推進センター「きらっとぴあ」3 回連続講座
医療	○（株）ソラスト介護職員初任者研修　堺東校×5 講座　泉大津校×4 講座
教育	○豊中市立西丘小学校 PTA 研修
その他	○おたまじゃくし（堺市西区　子育てサロン）　○太陽生命 ○子ども教室リーダー養成講座×2 回　○西区子育て支援者会議 ○大阪府立大型児童館ビックバンボランティアクルー養成講座



ｂｙ　　ありちゃん

SAY(性・生)の会

2013 年度は高等学校 9 校・中学校 5 校・小学校 1 校・支援学校 4 校・約 3,392 人の生徒さんと教職員３校・NPO 団体１回にプログラムを届けることができました。

★今年度新たな試みとして、自立支援コース連続 3 回講座を実施しましたので紹介します★

１日目　①大切なからだ　←立体模型を使って

・プライベートゾーン（からだの機能・名称）

・自立に向けて（食事・睡眠・排泄・清潔）

・性器の洗い方（マスターベーションのルールについて）

・月経の仕組みと手当、夢精について・誕生

②サークルズ　（境界線のワーク ）

・サークルズの概念を伝える

・ワークシートを用いて具体的に考えてもらう

・距離を測るアクティビティ

③カフェタイム・質問

２日目　①心の境界線・からだの境界線を考える

＊ねらい：被害者にも加害者にもならないために

１日目のサークルズを使って境界線を確認する。プライバシーの話、自分を確立、様々な関係性の人との距離の取り方、話し言葉などロールプレイで体験する。友達になりたい時の声のかけ方を、実践を通して考える

②自分の気持ち、相手の気持ちを知る

気持ちの伝え方を一緒に考える

③カフェタイム　　・質問時間

３日目　①ロールプレイを見て考える

設定：高校生なんだから付き合ったほうがカッコいい！？

付き合ったらキスは当たり前？自分の気もち相手の気もちは？

ねらい：社会に出て性暴力に会わない為の基本的な性の知識

セックスをする事でのリスク・妊娠・避妊（コンドーム・ピル）

性感染症・緊急避妊薬・性暴力について

被害にあったときには

信頼できるおとなに相談する

コンドーム実習

②周りからくる性の情報や

ネットや携帯によるトラブルについて

③コミュニケーション　～自分も相手も大切にする人間関係作り～

「自分の気持ちは自分の大切なもの」

・感情の扱い・アサーティブに気持ちを伝える方

④カフェタイム・質問

カフェ・質問タイム

友だち作りロールプレイ

今回は学校との連携を図りながら、プログラム作成から実施まで協力関係で行えたことが、生徒さんの境界線を理解するという過程に大きな効果があったと感じました。3 週に渡って計 3 回実施、先生方もワークショップに参加してもらい日常の関わりの中で復習を重ねる。
生徒さんの感想にも、「保健で習ったけどそれより分かりやすかった」「コミュニケーションが苦手なので勉強になった」生徒さん同士の中では、「3 年生は言葉使いが丁寧ですごい！」や、「ロールプレイが自然でかっこいい！」等お互いを見て学ぶ姿もあり、学年を超えて高校 1 年生から 3 年生で取り組んだ効果を感じました。

RE：プログラム

『ＲＥ：プログラム』中学生対象のいじめ防止プログラムは、姫路市教育委員会から依頼を受けた一般財団法人八尾市人権協会と協力関係を持ち「サバイバル 13」実行委員会を設置し、実施したものです。

2013 年度姫路の中学 1 年生を対象にクラス単位・ワークショップ形式で実施した。

取り入れたい視点は以下の点です。

〇個人の“こころ”の問題ではなく、「しくみ」として考える。

　構造の問題に焦点をあてる。

〇被害者に焦点をあてるのではなく、加害者・クラスのあり方を生徒と考え深めていく。

〇“子どもの権利条約”について伝える。

　ワークシートを使って、時には自分の気持ちに向き合ったり、グループや近くの友人と共有したりしながら新たな気づきや価値観の違いを認識していく。

授業の後半ではストーリーテーリングを聞きながら、いじめの起こっているクラスの一員として自分がなくすものは何かを考えていく。

更に、どうしたらこの状況を変えられるか、権利が守られたクラスにするために一人ひとりができることは何かを深めていく。

“いじめ”はとても深刻な社会問題であり、人類の歴史の中で連綿と存在し続けている。私は、おとなと呼ばれるに充分すぎるほどの齢を重ねている。　人と人の関係に苦しみもし、感謝もしてきた。だからこそ、子どもの声に謙虚に気持ちを傾け、いじめをちょっとでもなくしたいと、このプログラムを大切にしたいし広げていきたいと願っている。

ながさんより

RE：プログラム

リ・プログラム　いじめをちょっとでもなくしたいプログラム

「RE: プログラム　いじめをちょっとでもなくしたいプログラム」とは

2013 年に survival13 実行委員会が、中学生へのいじめの防止プログラムとして作成したワークショップ（参加体験型）です。RE という表記には Rights＜権利＞ Resilience＜回復、弾力性＞ Respect＜尊重＞ Empowerment＜エンパワメント＞ Emotion＜感情＞などの意味を込めています。また、RE: には返信、応答するという意味もあり、プログラムを受けた中学生と何かしら気持ちの通うところがあればと願いを込めたプログラム名になっています。

第１７回さかい男女共同参画週間における男女共同参画学習グループ活動　報告

子づれシングルと子どもたち

講師　神原　文子（神戸学院大学教授）

１月１９日（日）神原文子さんを迎えて、「子づれシングルと子どもたち」というテーマで、お話を伺いました。「子づれシングル」というのは、一人親家族の親たちをシングルマザー、シングルファザーではなく子どもがいるシングルの一生活者、を意味する神原さんが造られた言葉です。家族の形、結婚の形、働き方や生き方もさまざまあっていい。((*ˆ∀ˆ))

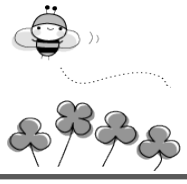
しかし！シングルマザー、シングルファザーなどひとり親とその子どもたちを支える社会的資源はとても不十分。特にシングルマザーの就業形態は、臨時やパート雇用が多く、時給も低い。生活が行き詰まり、夫の暴力から逃れるために子づれシングルとなった女性とその子どもたちの多くは、家計不安の為に進学をあきらめたり、元夫から身を隠したりなど、離婚後も生活困難な状況にある。いろいろな問題が見えた講座でした。

参加者の感想

少子化と呼ばれる中で子どもの支援に力を入れてほしいと考えられます。本当の社会の仕組みを変えて一人ひとりが自分らしく生きるために権利意識を持てるような社会になってほしい。
もっと自分のできるところでの啓発活動も必要とお話を聞いて思いました。

子づれシングルと言う言葉を初めて聞きましたが、どういう意味が込められているのかを知りなるほどと思いました。若年層の貧困が問題になっている昨今中でも特にひとり親家庭のしんどさをあらためて確認できました。

子ども視点の考え方にとても共感しました。何かできることをしていきたいです。



子づれシングルの状況がかなり深刻であることを確信した。ジェンダーの問題・子どもの人権の視点も入っての講座でわかりやすかった。一生活者として社会は何をしてくれますか？いろんな面でも学びを広めたく感じました。

今どきの就学前の子育て事情　～子育てしやすい地域にしたい～

関西大学　山縣　文治さん

２月２３日は、山縣文治さんを講師に迎えての研修講座でした。
「今どきの就学前の子育て事情～子育てしやすい地域にしたい～」と題して、
地域の子育て支援の実践にあたって、忘れてはならない視点や昔と今の地域の変化や実情の話を聞きました。

冒頭、「人権と権利のちがい」について考えたのですが、改めて言葉で表すのに頭を悩ませ、参加者の意見を聞きながら整理していきました。

ぐっと考えた後は、細長い風船を膨らませたり（なかなか難しい）、カエルの絵を描いたり、山縣さんのおっしゃる“遊び“を通して、ひとりひとりの心の動きを感じながら気持ちをほぐす時間がありました。

印象に残ったのは、「つらい」「つらくない」を横軸に、「楽しい」「楽しくない」を縦軸にクロスして４つのパターンについて考えたことです。

○　つらくて楽しくない　　・・・　　しんどい状態
○　楽しいがつらいこともある　・・・　日常にある状態
○　楽しくてつらくない　　・・・　　いきいきとした状態
○　つらくないが楽しくもない状態・・・　淡々としている状態

実は、淡々としている状態もなかなか良いのでは！との発想もあり、参加者は、イメージを膨らませながら大きくうなずいていました。

笑い声あふれる今回の研修では、立場が変われば見えてくるもの、感じるものが違ってくるのを意識しておくこと。そして柔軟なとらえ方をすることの大切さに気付けた充実したあっと言う間の２時間半でした。

by さこちゃん

ドコモ市民活動団体への助成　報告

「発達障がいのある子どもへのソーシャルスキルトレーニング」

講師　伊丹昌一さん

１／２６（日）に開催された表題の研修「SST～自己肯定観を育むためのプログラムつくりに向けて～」の研修に、ハピスポ*1から職員５人が参加しました。

研修では、ソーシャルスキルトレーニングを通して、良好な人間関係を築き維持していくための「人づきあいの技術」などについて学びました。中でも、特に印象に残ったのは「ほめ上手になりましょう。人は誰しも、ほめられてこそやる気が出るものであり、ほめるハードルを下げることで失敗経験も成功経験に変えることができる。」ということと、「相手をほめた自分のこともほめること（ご褒美でケーキ！等）で、自分も相手も誰も責めずにすむ関係づくりをめざす。」という内容でした。

今回の研修に参加して、障がいがあってもなくても、おとなも子どもも、誰もがみんな認め合い支え合える地域社会が大切なんだということを、あらためて実感しました。

ソーシャルスキルを身につけることは、生きづらさを一つ楽にさせてくれます。ハピスポでもこの研修を生かして、日々の子どもたちとの過ごし方を考えていきたいとおもいます。　　ハピスポ管理者　友寄　哲

★伊丹さんの講演は毎回超満員!!

今回も食い入るように集中してお話を聴いて、あっという間の２時間となりました!!

参加者の皆さんの声です。（アンケートより抜粋）

障がいのせい、育て方のせい、自分のせいにしないで、誰も責めず、行動を観察して冷静に対応するという内容がストンと心に落

新しい発見、自分を見つめ直すきっかけになりました。所々で放たれるジョークが最高!!

軽快なトークの中になる重みも同時に感じた。「笑顔が大事」心に刻んで頑張って行こうと思う。

自分が思っていた SST*2とは少し違い、分かりやすく実践しやすい物でした。次回はディスカッション出来る内容を希望。

＊１　放課後等児童デイサービス事業所

＊２　social skill training(ソーシャル・スキル・トレーニング)の略

一般社団法人「けあ・すぷりんぐ」放課後等デイサービス
『りーふ　ぷらす』

３月 27 日にりーふの新事務所で、障がいのある子どもたちにワークショップを届けてきました。去年に引き続き２回目の実施です。再会した子どもたちもいて、とてもなごやかな雰囲気で始めることができました。自己紹介カードを作り、一人ひとり前に出て発表。りーふやオレンジりぼんのスタッフも子どもに促され、自己紹介しました。その後、自分も相手も大切にする気持ちの伝え方をロールプレイを見て考え、いやと感じた時は「いや」と言ってもいいと、一人ひとり「いや」を言う練習をしました。みんな上手に参加してくれました。最後は曲を聴きながらクールダウンして終了。

とても楽しく、あっという間の１時間でした。

（たっしー）

放課後等児童デイサービス「ハピスポ」でのワークショップ

ハピスポは、障がいを持つこども達が放課後に過ごす場所として昨年秋にオープンしたばかり。
３月２９日（土）、暖かな昼下がり、ワークショップに行って来ました。
真新しいルームで、私たちを歓迎してくれました♪
「感情・自分も相手も大切にするコミュニケーション」がテーマで、短い劇を入れながら、気持ちについてみんなで考えた時間。この日のファシリテーターありちゃんと、冒頭から、自ら司会をかってでてくれた子とのＷ司会となりました。
これまで何百回とファシリテーターを務めたありちゃんも、Ｗ司会は初めて！
シナリオどおりにいかない劇もありながら、参加してくれた子達のきもちを大切に思いながら、進めて行きました。おかげで、こども達の持つ力をいっぱい表現してくれた時間になりました。

スタッフとしていらっしゃった方（大学生かな～？）とも、少しお話したかったなあと思いながら、タイムアップでルームを後にしました。　（しおちゃん）

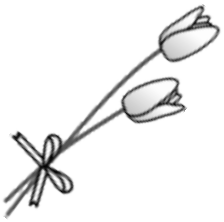
PLT「幼児期からの環境体験」ファシリテーターの資質

角田尚子さん（特定非営利活動法人 ERIC 国際理解協力センター理事代表）
ブログより転載
http://ericweblog.exblog.jp/

えんぱわめんと堺(略称 ES)で、年間１万人もの子どもたちに CAP や性教育、デート DV 予防などのプログラムを届けている北野真由美さんに、今回、PLT 事例参加者プログラムでの報告をお願いした。
ES による PLT の実践は、高原環境財団の「子供たちの環境学習活動」助成事業のお金を使って、小学校との連携で行われている。ちなみに、ES の活動メンバーのほとんどは、2011 年３月に、PLT ファシリテーターのトレーニングを受けている。

小学校２年生を対象に、２時間連続の時間枠で、年間３回ほどの実践を予定している。
(これまでに二回実施、詳細は、パワポ資料を参照)
人権プログラムを通して、子どもたちに自尊感情や「聞く姿勢」を育てたり、相互承認の姿勢を育てる活動を目指している北野さんたちにとって、子どもを自然に触れさせる PLT の「幼児期からの環境体験」活動は、「め、みみ、ハートできくあいず」のメッセージを子どもに浸透させることのできるすばらしい素材だったという。

何が、よかったのだろうか？
いまの学校教育は、子どもが集中できない、立ち歩くなどの課題を抱えており、外部から学級に入り込んで学習活動を指導する立場での関わりは、子どもの、ふだんの教員の目から見ているのとは違う視点で、子どもを見ることができることがいい点だし、北野さんたちの活動が求められる理由だと、北野さんは言う。
学習指導を始める。学級の始まり。うまく行く事もあるけれど、はみ出す子どももいる。
すべての子どもを、先生一人が満たすことはできない。学級人数が少なければ、個別対応はより容易であるから、加配や専科担任などさまざまな配慮が、文科省によっても自治体によっても取り組まれている。しかし、いまだに日本の学級人数のデフォルトは 40 人学級だ。



「はみ出した」子どもがはみ出したきっかけはささいなことだったかもしれない。最初に先生がいきごんで話していた時に、ちょっと窓の外のきらきらしさが、うれしくて注意してきけていなかったとか。

ちょっとしたことなんだけれども、その子の傾向は、その後も何回か繰り返されたりする。
その子のもっている傾向だから。外のきらきらしさに惹かれるのが。
何回か繰り返されると先生からの評価が定まってしまう。「ちょっと困った子ども」という分類かもしれない。他にも、この分類に入れられる子どもはいる。先生は学級経営のために、子どもをいくつかのカテゴリーでとらえて対応する傾向があるからだ。
そして、学習指導においては、これらのカテゴリーは、オーケストラのパートのように、役割が与えられてしまう。一問一答の答えを引き出す時、中の下のカテゴリーから当てて行く。そうすれば、全体の理解度がはかれるからだ。
答えがあっていれば、オッケー。この問題は、クラスのほとんどが理解したということ。
間違っていれば、とりあえず、中の中、中の上とカテゴリーを上げて行き、最後には正解に至る。カテゴリーall A。

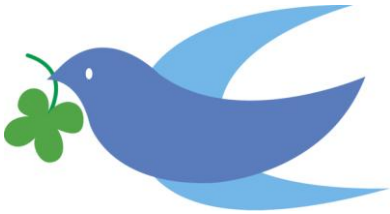
このやり方は、学級の理解度をはかるには有効だが、「間違い」をきく回数が「正解」をきく回数より多くなるという欠点を持っている。とほほなことだが。
さらに、はみ出してしまっている子どもが何を考え、理解しているかは、学級での共有の外側に置かれている。

この評価と判断に基づく学習指導のパターンが、長く続いてしまうと、カテゴリーは固定化する。最初は、学習指導上の分類であったものが、その子に対する判断であったかのように、見えて来てしまう。ある子どもに対する判断が固定化する。偏見というのは一度身に付いてしまうと、覆すのが大変だからだ。

これは、誰が悪いのでもない。先生が多忙すぎる、対応すべき子どもの人数が多い、子どもの傾向を読み解くための鍵となる情報が少ない、どの教科も学習指導のパターンが同じだと子どもの反応も固定化してしまう、などの複合的な条件が重なった結果だ。

そこに北野さんたちのプログラムが入る。プログラムは、集中と相互尊重につながる「聴く姿勢」の定着をベースに、CAP であれば「No,Go,Tell」を伝える三種類のロールプレイ、子どもの権利条約の「権利」という言葉についての理解、デート DV などの事例を通しての話し合いなどで、子どもからの意見を引き出して行く。

ポイントはここなのだ。ファシリテーターとして介入する時、大切なことは、ふだんの学習では「はみ出している」子ども、はじかれている子ども、意見を言えない子ども、教員の判断が固定化してしまっている子どもにスポットライトがあたるようにする。発言をうながす、発言内容をとりあげて確認する、認める、他の子どもたちとのコミュニケーションを成立させる。



小学校低学年の子どもにとって、大人の手本は重要だ。しかも、「外から来てくれた特別な人」が、承認するのだ!　子どもたち相互の見る目が変わる。見る目が変わると、承認の目で見られた子どもは、変わる、のだ。成長するという言葉で表現しうる変化が生まれる。自信を持つ。子どもの相互関係の中に入る。コミュニケーションが成立する。

もし、ここで、ファシリテーターが「一問一答」のような「閉じられた問い」すなわち正解が一つしかない問いをしたとしたら、どうなるだろうか。いつもと同じオーケストラが始まる。コンダクターが変わっただけだ。大人が期待する答えに、いちばん早くたどり着く能力を持っている子どもは、カテゴリー「A」に分類されている子どもなのだ。

「どう思う?」「どうしたらいい?」「なんでそう思うの?」などのいわゆる「開かれた問い」open-ended questions が開く子どもの反応の多様性を、ファシリテーターが十分に意識し、受け止めることが、とても重要になる。
加えて、「すごいねぇ」「そんな考えもあるんやなあ」「わあ、なんでそう思うの、教えて」「ねえ、いますごいこと言ったよ、聞いて」などの受容・承認を示すファシリテーターの反応・態度・姿勢、からだが大切だ。心からの思いでなければ、子どもは見抜くからだ。

そのような「えんぱわめんと堺」のファシリテーターにとって、「幼児期からの環境体験」プログラムは、まさしく子どもたちの反応の多様性を引き出す宝箱のようなものだったのだ。もちろんそれは、ここで述べたようなファシリテーターとしての技術と態度に裏打ちされた実践であったからに他ならない。

北野さんたちの実践は、学校現場に、一人ひとりの子どもについての新たな視点と、子どもたちの新たな関係性の可能性を切りひらいて見せる。自分一人では、その視点の転換のきっかけをつかめなかった先生方にとっては、この変化は大歓迎である。学級のオーケストラは、音が広がり、新たな曲の可能性が生まれ、学級であることの意味が深まりを持つ。

ここに、学校と NPO のコラボレーションの大きな意味がある。

さて、では、PLT「幼児期からの環境体験」を推進していく上での課題を整理しておこう。
ここまでで確認できたことは、以下のことである。

1.幼児期からの環境体験は、子どもの相互尊重的関係性を育てる宝箱である。
2.ファシリテーターの資質としては「開かれた問い」「多様性の受容」が求められる。

1 については、「幼児期からの環境体験」の一義的目標を関係性を育てることに置いてよいのかどうか。その他の目標、特に PLT が重視している「考え方を学ぶ」や概念の理解は、小学校の中学年以降の目標として整理してもよいのかどうか。
2 については、1 とも関連して、「アクティビティのねらい」つまりは教えたいことへのプログラムの流れの作り込みや誘導、落としどころへと向かいたいのは、ファシリテーターとして当然である。

今回の三つの PLT 事例の発表を聞く限りでは、北野さんたちにとっては、「幼児期からの環境体験」は宝箱であった。その実践には迷いはない。それに対して奇二正彦さんは「落としどころ」に向かうことができなかった思いを語り、また Forest Nova は、大学生ではあるが、森林保全に取り組む団体として、もっと知識を身につけて行きたいと、ファシリテーターとしての成長の目標を二つながらに実現したいと、ふりかえりで述べて
いた。

答えは、幼児たちからの反応の中に見えているのだ。かれらは、まるで一腹の子犬たち
のように、互いによりそい、かかわり、ふれあい、おしあいへしあいする存在である。

彼らの心に相互尊重的な価値観を育てることが、彼らが次の発達課題において、個性を発揮し、協力を学び、より深く考え、気づく力を、しっかりと発揮していくベースとなることだろう。

幼児期の子どもの反応を、今回の PLT 事例参加者プログラムを通して、確認できたことは、大きな収穫であった。

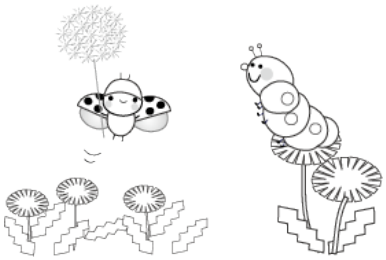
今後、PLT ファシリテーターとして、どの発達段階でも対応できるのか、それとも、年齢段階による得手不得手の違いがあるのかどうかは、本人の判断がもっとも妥当なのだろうと思いつつ、評価の視点を PLT 日本事務局としてはしっかりと持っていたいと思う。

幼児期からの環境体験を指導するファシリテーター育成に必要なこと。どの子もはじき出さない。みんな大切ないのち。いのちは多様な輝き方をする。輝きを見いだす。みんながその輝きに気づく。まずは、そのことを、伝える対応ができること、ですね。

ちょっとひとこと

私事ですが…

うちの二男の在籍する五年二組は、何かとトラブルの絶えないクラスでした。年に数回しかない参観に行ったり、子どもたちからの生の声を聴いていても、問題が山積みなのは保護者の目から見てもよく分かりました。そのクラスにも二学期に CAP の授業がありました。私は何かいい報告が聞けることを期待していたのですが…。実は CAP の授業の直後にも大きなトラブルが発生したそうです。二男からは、「CAP の人せっかく来てくれたけど、このクラスにはあんまり…。」といった声も聞き、私は愕然としました。



私自身 CAP の人であると同時に一人の保護者としてできること、「安心 自信 自由」「No Go Tell 」は機会ある度にどんどん子どもたちに伝えてゆきたいと思います。

（今井）

映画　ダラス・バイヤーズ・クラブ（DALLAS BUYERS CLUB）

余命 30 日と宣告されたら、どうしますか？
医者の言うとおりに入院し緩和ケアを受けながら死を待つか、せめて新薬の臨床試験に協力するか、あるいは自分にあった治療法を見つけるために行動を起こすか...

この映画の主人公ロン・ウッドルーフは、治療法を見つけることを選んだ。エイズは同性愛者しかかからない病気、という根拠のないうわさが信じられていた 1980 年代のことだ。異性愛者のロンはエイズを発症し余命 30 日と宣告される。異性愛者のロンは、自分が同性愛者の病気にかかるはずがないと、治療を拒むが、メキシコに渡って治療を受ける。そこで手に入れた薬をアメリカに持ち込み、エイズ患者に売り始める。無認可の薬を売ることは犯罪になるため、会費を集めて会員を募り、会員には無料で薬を配るというシステムを考え出す。これがダラス・バイヤーズ・クラブだ。新薬を推奨する医者や製薬会社の妨害を受けてもあきらめず、ついには、政府に対しても「個人が健康のために自分にあった治療・薬を選ぶ権利を侵害された」、と法に訴える。

彼の行動は、自分が生きのびるため、自分の薬代のためのものだった。しかし、彼個人の生きたいという思いと、不当に扱われたことからの怒りが周りを巻き込み、徐々に社会に影響を与えていく。たった一人で戦っているつもりが、気が付けば周りに仲間が集まっていた。そのことに気付いた時の照れくさそうなロンの表情が、何ともいえずかわいらしかった。

ロンも同性愛者に対してひどい偏見を持っていた。その彼の性的少数者に対する見方が、ビジネスパートナーとなるトランスジェンダー（性同一性障害）のレイヨンと関わることで、少しずつ変化していく様も興味深かった。相手をよく知らないことが、差別・偏見につながるということがよくわかる。

映画を見た後、一人の力、生きる権利、性的少数者への偏見、人や社会とのつながりなど、あれこれ考えながら帰途についた。一人で見に行ったので、話す相手がいなくて残念でした！

今年のアカデミー賞主演男優賞と助演男優賞をとった俳優の演も圧巻なので、機会があれば、是非見てください。

（たっしー）

CAP 活動報告

H25年９月
～H２６年３月

	子どもワークショップ									おとなワークショップ	
	小学校			幼稚園・保育所			中学校			おとな（教職員）	人数
	校数	ｸﾗｽ数	人数	校数	ｸﾗｽ数	人数	校数	ｸﾗｽ数	人数		
９月	11	26	820	0	0	0	0	0	0	11(11)	37(37)
10月	11	25	836	0	0	0	4	16	539	16(15)	128(68)
11月	10	20	673	1	4	130	1	4	152	13(12)	93(94)
12月	4	12	414	1	1	30	1	4	160	6(6)	26(26)
１月	1	2	71	1	1	30	2	6	228	5(4)	89(19)
2月	3	9	326	2	2	60	1	6	200	6(6)	26(26)
3月	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
合計	40	94	3140	5	8	250	9	36	1279	57(54)	399(219)

★CAP スペシャルニーズプログラム子どもワークショップ

支援学校２校（中学部１校・高等部１校）　６ワークショップ　82名

＊助成金報告＊

ありがとうございました　！！！

○　公益財団法人　髙原環境財団助成事業・・・ＨＲ事業として

○　堺市民活動支援基金・・・研修講座　講師：山縣文治さん

○　ドコモ市民活動団体への助成・・・オレンジりぼん事業として

２０１３年度の助成金事業も無事終了しました。
助成いただいた各団体に心より感謝申し上げます。

☆2014 年度も早々に助成および寄付を頂いています☆

○　公益財団法人　日本社会福祉弘済会・・・オレンジりぼん事業として

○　堺市民活動支援基金より、ES 指定で寄付をいただきました。

ES インフォメーション

第１２回総会　＆　イベントご案内

日時：　2014年５月１７日（土）

総会　　13:15～14:15

総会イベント　14:30～16:30

～「happy しあわせを探すあなたへ」～

DVD 鑑賞＆ティータイム

場所：　堺市総合福祉会館

詳しくはＨＰをご覧ください。http://www.npo-es.org/

会員募集～入会手続き～

正会員　　5,000 円

（初年度のみ入会金 3,000 円）

賛助会員　1,000 円（入会金なし）

◎　更新日は年２回（1 月 31 日・8月３１日）です。

◎　会員有効期間は１年です。

郵便振替～通信欄に必要事項をご記入ください。

加入者名　特定非営利活動法人えんぱわめんと堺

口座番号　００９２０―９－１８２１１６

正 会 員　　２９名

賛助会員　５２名（６２口）

２０１４年　３月

ＥＳの活動はみなさまからの寄付、ご支援にささえられております。今後ともよろしくお願いいたします。

〒599-８２４４　堺市中区上之８０１番５号

特定非営利活動法人えんぱわめんと堺／ＥＳ

TEL：072-230-5588　FAX:072-230-5589

E-mail：empowerment@lily.ocn.ne.jp

編集後記

この春、わが子の卒業式に（中学・高校）と続けて出席しました。

どちらの式でもこども達の送辞や答辞が、心がこもっていて、未来にむけての素直な気持ちが語られ、おとなの祝辞よりも何倍も心に響きました。

また、今年度、ES メンバーに協力してもらって、小学生向けベーシックのワークショップで、念願のファシリテーターデビューを果たしました。

自分の価値観や姿勢に改めて向き合い、未来に向かうこども達の心に寄り添いたいと思います。　（しおちゃん）